殘花聚園（十）

（日本幼兒教育史資料）

東京女子高等師範學校教授　石川謙

八、大原幽學の幼兒教育觀（一）

一

八石教會とか性理教會とか云ふ名前で、今日も尙千葉縣地方の一部に維持せられて、農村教化の上に堂々たる力を持つてゐる教團がある。此の教團の先祖となり教義の創設者となつたのは、大原幽學である。今度は其の幽學の幼兒教育觀に就いて稍々詳しい紹介をして見よう。大原幽學は、寛政九年に名古屋藩の家臣大導寺玄蕃の次男として生れ、安政五年に下總國香取郡長部村に於いて自殺した。時に享年六十二であつた。幽學は文化十一年、歳十八で勘當の身となり、京・大阪を中心として、近畿地方の各地を彷徨することと十六ヶ年であつた。此の間に神道・儒教・佛教等の教義を修め、又好んで史蹟・名所等を歴訪した。天保元年三月儒學の師匠提宗和尙（近江國松尾寺住職）の教を受けて人心教化のことに志し、八月に信濃國上田城下に入つて初めて、改心手引の事に從事した。改心と云ふのは幽學教化の目標でもあり手續きでもあつた。此處に居ること一年にして、上田・小諸の城下を中心に、四百餘名の門人が出來たが、翌る二年八月に去つて江戸に來た。時に幽學三十五歳であつた。天保三年三月上總の久留里に來て、藩の家老岡本氏の舍弟新九郎を改心手引したのを手始めにして、文雅風流と教化との二道かけて房總の野を往來し、時に屢々常陸を訪ひ又江戸を訪ねた。翌四年の日記から、段々道歌の記載が多くなり、五月十二日の條に「性理學」の文字が初めて見えて來る。天保六年は性理教會の發達史上記念すべき年であつた。此の年になつて長部村の遠藤本藏の書院に假道場を造り、教會の基礎を固めたのであつた。同九年になつて幽學の教化事業は愈々實生活指導に這入つていつた。即ち子孫永續法として先祖株組合の設立を思ひ付き、これを調査立案したのであつた。つまり改心教化から農村指導

へ移りかはつたのである。嘉永二年には改心樓を長部村字八石に建てゝ、教化の本部とした。時に幽學五十三歳であつた。ところが越えて嘉永四年には幕府の嫌疑を受けて江戸に送られ、取調べを受ける事七年の長きに及んだが、安政五年正月になつてやうやく罪を赦されて長部村に歸る事が出來た。そして其の三月に自殺して世を終へたのである。

彼の著書として殘されてゐるものに『微味幽玄考』と云ふのがある。先づ最初に、此の書物の第六章兒童教育と云ふ部に見えてゐる幼兒教育についての思想を簡單に紹介して見たい。

幽學の考によると、胎内教育――所謂胎教が必要であつた。然し其のことは今此處では觸れないでおく。そうして出産後の養育の法則だけを取上げて、問題としたい。

「夫れ人は生れて乳を呑み初る事則ち物を思ふの初也、然れども其百日の中は物を見るとも見ざるとも無く心は雲歟霧の如し

細註」其百日の中は譬ば實植したる松の地中を出たるに齊し

百日を過ぎてより二歳近く成るに隨ふて惠顔も聲を發して笑ふ事に至る也、是れ則ち漸々に心の心たる事に至る所以なり、故に見聲事に漸々力を得て其氣質の用の種と成る事の盛となるも亦是に順ふ以下皆是に倣ふべし

「細註」其心の生長したる事松の地中を出て則ち松の形ち作りたるが如し

これによると、子供は生れてすぐから既に養育竝に教育に就いて、注意されなければならない。殊に生れて百日の間は、種から發芽した松が地中を出たやうなものであり、それから後の二百日間は、松の形がはつきりと出來上る時期である。隨つて施す術が甚だ少いにも拘らず、注意し警戒しなければならない事は、此の時期に於て最も多いのである

「二歳と成りては物の名、黑白の名を知らずといへども黑白を見別け或は物音に驚く事抔有る事に至ては其見聞事の力も亦漸々强くなるなり

「細註」是れ松にして則ち形の顯はれたる頃の如し

二歳になると、未だ物の名も知らず色の名を知らず形の名を知らないが、それは言葉を知らないと云ふだけの事であつて、物を見別け色や形を見別ける事は既に始まつてゐるのである。だからこそ物事に驚く事もあり泣く事もあり喜ぶ事もあるのである。既に一通りの人間生活の心の運びが備はつてゐると見なければならぬ。隨つて周圍から受ける影響によつて、心が左右せられる姿はいよ〳〵はつきりして來るのである。

「三歳近かくなるに順ひ笑ふ顔と怒かる聲とを見分け聞分くることに至る也、或は三歳となりては物を言ひ初

め或は歩行初めるこゝに至て則ち心の心たるこゝに至りたるもの也故に見聞くこゝに思惑有り

「細註」是れ松にしては二葉極りたる頃なり故に四歳近く成るに隨て松にして松の體極り明れば枝を出すの潤を持たる頃の如し

四歳近く成るに順ひ則ち才智の萌を能く備る頃也

「註」故に此四歳と成る迄の中に其心に移す事則ち所謂氣質の用の種と成る者の本元也と知るべし然れば其移す風に依て其行の善惡邪正を顯す事の本元も亦是に窮るべし

「細註」故に子を育る者は必ず先づ大いなる法を極て以て是を移す可しと云ふなり、才と智とは相混じたる者なれども性質聖人にあらざる者の才進む時は必ず智後るゝものなり故に必らず先づ智を元として才は必らず末として育るを宜しとす可し、又云ふ才より智を勝しむるには必ず先づ寛柔を以てして俗に云ふ馬鹿のやうに育て可し、然るに於ては才に尅るゝ事なければ智の後るゝ事も無かる可し

又云愚俗の性質なる者抔を若し利口を以て育るに於ては或は物に浮れ抔俗に云ふ輕るはずみをして家身を亡す者擧て數ふ可からず見て知る可し、故に器量無き者は猶さら利口を必ず其身の敵と心得べし、亦愚俗の目には馬鹿と見ゆるとも仁に近きを宜しとすべし、是れ則ち家名相續の大事なり

四歳ニなりては萌したる才智の芽をふき出すの頃也故に物を辨へる事に至る也

「細註」松にしては始て枝の出たる頃なり是れ亦枝々の精の善し惡しもつちかひ肥しの上手と下手によつて枝振の善惡も出來るなる可し、人も亦是の年迄の氣質の用の種善ければ其所爲も善き事を辨るなり亦若し其種の惡ければ其思ひ附事皆惡し能く試み其幽玄を能く味ひ知る可し」

三歳になるニ、自ら笑ひ泣き怒るばかりではない。他人が笑ふ顔、怒る聲を見分ける樣になり、聞き分ける樣になり、そうして言葉も判つて來るし歩く事も始まる。つまり運動ニ初歩の知覺が始まるのである。此の事實を彼は「見聞くこゝに思惑有り」ニ記してゐる。四歳からは、わけても注目すべき畫期的な成長をするものニ、彼はみてゐた。四歳近くになるニ、もうすべてに知覺の芽が充分に備はつて來るニ、彼は見てゐる。此の知覺の芽に對する周圍の取扱ひが極めて大切である。其の如何によつて、一生涯すく〳〵ニ伸びるであらう心の成長を、助ける事にもなり妨る事にもなるのである。

彼は此處でも心ニ體ニの成長を、松の成長にたニへて、自然の成長ニ偉大さを讃へてゐる。然し人間の場合に於ては、既に此の頃から一定の方向が與へられなければならぬニ考へてゐるのである。

「五歳近く成るに順ひ漸々才氣舒る故所謂種の本元の善惡によりて其父母兄弟等に對しても其云ひ作す事に善惡の差ひ則ち的前に顯るゝ事見て知るべし

「細註」松の枝ぶりよからぬとて漸々の事に出たるばかりの枝を切る時はその木痛み屈して舒難かる可し、人の子も亦是に似たる味ひ有り、其所以は才智初めて顯はれ漸々に言ひ爲す事の宜しからねばとていたく是を制する時は其制せらるゝ困みに思ふ事も云ふ事も唯々捻塊るばかりにて才智屈して舒る所以無し、是に於て所謂氣質の用の種と成る幽玄を能く味ふて以て世の人の行ひに大に善惡邪正の顯るゝ證據も亦眼前にあるを見て知るべし才智の增舒と屈る所以十五歳迄は皆此意に倣ふ可し

五歳と成りては陽氣總身に滿ち渡る時にして才氣の舒る事も亦盛なる時なり、然れども其才氣は舒る事盛なる耳にして善惡邪正を辨る程の器量にあらざれば人の教も誡も更に心に止まらず唯々己れの發る儘に心の働く耳の頃也」

五歳になると精神の力も身體の力に伴つて、土臺の固いものとなり張切つたものとなつて來るが、然しまだ張切つてゐるといふだけで、善とか惡とか、正とか邪とか云ふ判斷の力は充分に伸びては來てゐないのである。隨つて思ふまゝ感ずるまゝ働いて、遠慮氣兼を持たないのである。我々は此の自然の發育の段階を、飽くまで重んじなければならないが、同時にこの成長が向つて行くべき方向に對しては、たへず指導の準備を持つてゐなければならない。

かやうに幽學の幼兒に對する觀方は、其の觀察が正確でもあり精密でもあつたので、此の點に於ても益軒等よりは、一歩も二歩も前進してゐると見る事が出來る。が、それよりも一層注目すべき事は、彼は飽くまでも此の自然發達の狀態を重んじて、出來るだけ自然のものを自然のまゝにすくくと、發達せしめようと企てた點である。隨つて五歳迄の彼の教育的企ては飽くまで內に隱されて、親なり、乳母なり、周圍の者の注意深い警戒が子供に直接にしられないように、それでゐて內部には極めて眞險に進められてゐなければならぬと考へた點である。

一體、天保以後の教育の考へ方の中には、西洋の影響をうけてかなり進んだものが色々の部面に現れたのであるが、幽學の此の考にも幼兒の教育の方面に於て、代表的な進歩主義を見出すことが出來よう。（昭和十四年十月十二日）

岩手縣保育研究會（第三回）

一、期　日　昭和十四年十一月四日（土）
　　自午前九時至午後四時
一、會　場　盛岡市大澤川原小路泉幼稚園
一、實地保育
　　自午前九時至午前十一時
一、泉幼稚園ノ研究發表
　　自午前十一時至正午
一、實地保育ノ批評並懇談
　　自午後一時至午後三時
一、視察報告、全國保育關係者大會狀況
　　自午後三時至午後四時
　　四戸熊藏氏